

児童養護施設における働き続けることができる職場環境の諸要因

ーケア肯定感に関するアンケート調査を通してー

○ 日本社会事業大学大学院 西台こども館 氏名 座安晃生 (会員番号 008315)

キーワード：児童養護施設，職場環境，ケア肯定感

1. 研究目的

児童養護施設における働き続けることができる要因である「対等な職員関係」、「やりがい」や「仕事・家庭の両立」を統計的に明らかにするためにアンケート調査を行った。因子分析やピアソンの積率相関係数の算出，共分散構造分析(SEM: Structural Equation Modeling)で「対等な職員関係」や「仕事・家庭の両立」は明らかになったが，「やりがい」は統計的「天井効果」になったため除外した。そのため，やりがいを明らかにするための尺度を新たに作成することを試みた。本研究は，児童養護施設における職員のケア肯定感を明らかにすることが目的である。ケア肯定感とは，子どもの成長を感じるまたは職員自身の成長を感じるなどの職員が支援するうえでのやりがいである。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査対象

調査対象施設は，東京都社会福祉協議会の児童部会に所属する児童養護施設 60 施設であった。調査対象者は，直接子どもの養護に関わる職員(保育士・児童指導員だけではなく，個別対応職員、家庭支援専門相談員、自立支援担当職員)であった。事務員や調理員，栄養士，心理職，看護師は対象に含めなかった。調査期間は，2024 年 10 月～12 月であった。各施設には，QR コードを印字したアンケート用紙を 20 部ずつ郵送した。回収数は 149 人，回収率は 12.4%であった。

(2) 調査内容

小野内(2018)は，「介護肯定感」を測定する尺度の開発を試みた。本研究では，小野内の尺度を児童養護施設でも使用できるように文言を変更し，「介護肯定感」から「ケア肯定感」に変更した。調査内容は，対象者の基本属性(性別・年齢・勤続年数・職員集団の人数等)，ケア肯定感に関する項目，職員関係に関する項目，仕事・家庭の両立に関する項目や定着可能性に関する項目を構成した。

(3) 分析方法

分析では，児童養護施設におけるケア肯定感尺度の信頼性を確認するために，平均値や標準偏差から天井効果やフロア効果が出ないか検証した。また，ケア肯定感を問う尺度に対して因子分析を施した。下位尺度間の関連や下位尺度および基本属性の関連を明らかにするためスピアマンの順位相関係数を算出した。分析は，統計解析ソフト JMPPro(17)を使用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、倫理的配慮に基づき、公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンターの倫理審査委員会に調査内容を提出し承認を得た(24E0002)。調査対象者には、研究目的や個人情報取り扱い、回答の拒否及び同意の撤回、データの匿名化等の説明を書面にて行った。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

調査項目 34 項目に対して主軸法・Quartimin 回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった項目および共通性の低い 4 項目を除外し再度、主軸法・Quartimin 回転による因子分析を行った。結果、6 因子構造 30 項目になった。第一因子は、ネガティブな職員関係に関する内容から【職員間の不和】(6 項目 $\alpha = 0.8392$)と命名した。第二因子は、支援に関するやりがいから【ケア肯定感】(7 項目 $\alpha = 0.8682$)と命名した。第三因子は、職員と子どもの関係性に関する内容から【職員・子どもの信頼関係】(5 項目 $\alpha = 0.7883$)と命名した。第四因子は、職員の成長に関する内容から【ケアが齎す職員の成長】(5 項目 $\alpha = 0.8084$)と命名した。第五因子は、仕事・家庭に関する内容から【子どものケア・職員の家庭の両立】(4 項目 $\alpha = 0.6743$)と命名した。第六因子は、職員間の対等性に関する内容から【子どもの理解に努める職員関係】(3 項目 $\alpha = 0.6961$)と命名した。児童養護施設におけるケア肯定感の下位尺度に相当する項目の平均値を算出した。【職員間の不和】($M=3.657$, $SD=0.971$), 【ケア肯定感】($M=4.3$, $SD=0.869$), 【職員・子どもの信頼関係】($M=5.475$, $SD=0.894$), 【ケアが齎す職員の成長】($M=5.152$, $SD=1$), 【子どものケア・職員の家庭の両立】($M=4.398$, $SD=0.879$), 【子どもの理解に努める職員関係】($M=4.586$, $SD=0.775$)であった。下位尺度間の関連と下位尺度および基本属性の関連を探るためにスピアマンの順位相関係数(Shapiro-Wilk test が有意のため)を算出した。相関係数は、0.2 以上をもって相関関係があるとみなした。「勤続年数」, 「宿直回数」間の相関係数は、-0.216 であり弱い負の相関関係($p < 0.05$)が見られた。【ケアが齎す職員の成長】, 【ケア肯定感】間の相関係数は 0.752 であり強い正の相関関係($p < 0.0001$)が見られた。【ケアが齎す職員の成長】, 【職員・子どもの信頼関係】間の相関係数は 0.582 であり比較的強い正の相関関係($p < 0.0001$)が見られた。【ケアが齎す職員の成長】, 【施設職員の人数】間の相関係数は 0.225 であり弱い正の相関関係, 【子どものケア・職員の家庭の両立】, 【宿直回数】間の相関係数は -0.298 であり弱い負の相関関係($p < 0.01$)が見られた。

5. 考察

児童養護施設におけるケア肯定感に関する調査から【ケア肯定感】, 【職員・子どもの信頼関係】, 【ケアが齎す職員の成長】が統計的に明らかになった。また, 【施設職員の人数】が【ケアが齎す職員の成長】, 【子どもケア・職員の家庭の両立】に影響していることから施設職員の人数が多いことが子どものケア, 職員の成長に影響することが示唆された。加えて, 【宿直回数】が【年齢】, 【勤続年数】, 【子どものケア・職員の家庭の両立】に影響していることから職員のライフステージに応じて宿直回数の調整をすることが示唆された。